【特色あるフロンティアスクールの取組事例】

都道府県番号	２３
都道府県名	愛　知　県

（①□　②□　③☒）
※該当する観点にチェックをすること

Ⅰ．学校名及び規模

豊川市立南部中学校

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊	計	教員数	
学級数	6	7	7				2	２２	４２	
児童数	２３６	２６１	２６６				4	７６７		

Ⅱ．実践研究の概要(主題（テーマ）及び設定の趣旨)

・主　題

確かな学びを子どもたちに　－基礎・基本を重視した教科指導－

・テーマ設定の趣旨

「確かな学び」とは、「生きる力」を育むための学び、すなわち自分で課題を見つけ、自ら学び考え、主体的に行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を育むための学びである。この「確かな学び」を、生徒が最も多くの時間をかけて学習活動をしている教科の学習で身に付けさせようと考えた。

さらに、「確かな学び」に迫るためには、基礎・基本を確実に身に付けることが不可欠であり、基礎・基本こそ「確かな学び」の土台となると考え、「基礎・基本を重視した教科指導」に取り組むことにした。

Ⅲ．実践研究の内容について（選択した観点を中心に記述）

（ｉ）研究体制の工夫

・　研究テーマ「やればできる！数学　－学習カードを利用した実践－」

・　本年度より目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）になった。本校では県総合教育センターから出された「評価規準、評価方法等の開発の手引き」をもとに研修し、職員間の共通理解を図ったうえで、各教科の評価基準表を作成した。そして、それに基づいた観点別評価及び評定を行った。

本実践者の担当する２年生４クラスの１学期の結果は別表のようであり、その達成度の低調さを改善すべきであることを痛感させられた。入学当初から学習に対してあまり意欲的でなくわからないままに済ませてしまいがちな生徒が少なくないことも影響していると考えられた。これらの生徒にやる気を持たせ、基本的な内容を理解させることによって、観点別評価・評定を少しでも向上させたいと考えた。また、観点別評価が全て「Ａ」であるにもかかわらず評定が５とならない場合があり、こうした生徒も意欲的に取り組み、さらに力をつけていけるような支援もしていきたいと考えた。

夏休み中の現職研修における数学教科部会で、１学期の評価の妥当性について協議をした。授業時間内では理解が不十分であっても家庭学習を通して理

解を深める生徒、授業ではできても学期末における「まとめテスト」では定着していない生徒など､多様なタイプの生徒の評価を適切に行っていく難しさが感じられた。

そこで、評価規準を生徒に知らせ、目標をもって授業に臨めるようにしたいと考えた。具体的な手立てとしては「学習カード」を利用した。以下、生徒に意欲がわき、評価を向上させることができた実践を示す。

（ⅱ）実践研究の内容

1　仮　説

(1) 授業のはじめに目標を明らかにすれば、本時の視点が定まり、意欲的に授業に取り組むことができるだろう。

(2) 日々の授業の振り返りを大切にすることによって、具体的に努力すべき点が明らかになれば、次時への意欲につながるだろう。

(3) 単元の学習計画を知らせれば、見通しを持って計画的に学習をすすめることができるだろう。

2　手立て

仮説を検証する手立てとして「学習カード」を利用することにした。留意点は次の３点である。

・　その時間で誰もができるようになってほしい最低限の目標を示し、「これならできるかもしれない」という気持ちにさせる。

・　目標と授業の取組について短い時間でも振り返りをする（自己評価）。

・　単元を通して目標を一覧にする。本校の年間指導計画をもとに、その単元での学習の目標を記載し、見通しを持たせる。

3　実　践

「一次関数」と「図形の調べ方」の２単元で実践した。

(1)「一次関数」

ア　学習カードの使い方を説明する

単元の授業が始まる前に、学習カードを配布し、以下の説明をした。

・　単元の学習のねらいがすべて書いてあること

・　ねらいが達成できたと自分で判断したらチェックすること

・　日々の授業態度も自己評価すること

イ　授業での利用の仕方とその後の処理

学習カードを利用したことで、授業の流れがパターン化しスムーズになった。

・本時のねらいを知らせる。　⇒　・授業を進める。　⇒

・本時を振り返らせる。　⇒　・回収したカードをチェックする。

ウ　カードを使って良かった点

○　授業のねらいを提示したことで、教師側は板書を工夫したり、練習問題を繰り返し実施したりすることで、今まで以上にポイントを押さえた指導をするようになった。また、生徒は「今日はこれがわかればいいんだ」と意識することができた。

○　「学習カード」による自己評価の結果や、意欲に欠ける生徒に対して、机間指導での個別指導を心がけた。手をかけることで、授業に真剣に取り組む生徒が増えた。

○　挙手をする生徒が増えた。授業の中で挙手をし、発言できることは生徒にとって真剣に取り組めたという充実感を引き起こさせる。また、生徒相互の刺激になり、授業が活発化してきた。

エ　問題点

○　１時間単位の区切りがわからず授業の進度と合わせたチェックがしづらい部分があった。

○　ねらいに対して達成できたかどうか自信の持てない生徒は迷うことがあった。

(2)「図形の調べ方」

ア　学習カードの改善

生徒がチェックしやすいよう、１時間単位で区切り、教科書のページ数も記載した。また、ねらいもチェック項目にし、達成の度合いによりＡＢＣの自己評価をするようにした。そして、計画的な家庭学習ができるよう、留意点を一つ追加した。

・　テストの予定、「副教材」のページ数も計画の中に入れる。

いつテストが行われるかを予めつかんでいることで、授業の進度に合わせた自主的な学習を期待し、激励した。

イ　授業での利用の仕方とその後の処理

学習カードを生徒の自己評価だけでなく、教師からの評価も書き入れるようにした。これにより教師から認めてもらっているという満足感が生徒に生まれた。また、副教材のチェックの日付を入れることで、授業の進度に合わせた自主的な学習を促すことができた。

ウ　カードを使って良かった点

○　「学習カードにＡをつけたい」という気持ちから、数学の苦手な生徒たちにも授業への集中度の高まりや、自主的な学習の意欲の向上が見られている。

＜生徒の声＞

・このカードがあると、できているかどうか自分自身のことがよく分かる。
・教科書をどこまでやったかがわかるので、復習しやすいです。
・学習カードは、自分の分からなかったところ（ＢやＣ）が、見てすぐ分かるので、テスト前などに点検して、復習できる。

(iii) 成果と課題

(1) 学習カードの有効性

ア　最低限の目標を示したことで、教師も生徒も「ねらい」を意識でき、集中度が高まった。

イ　簡単に振り返ることができるようにしたことで、カードへの記入を無理なく継続できた。

ウ　単元を通して一覧表にしたことで、自分の学習の振り返りにつなげられた。

エ　テストの予定や副教材のチェック項目を設けたことで、自主的な学習ができるようになった。

(2) 今後の課題

次単元「図形と合同」では、２クラス３コースの習熟度別クラスを編成する予定になっている。担当教師が変わっても、この学習カードが個人の学習状況を把握する「病院の個人カルテ」のような働きをするものと考えている。

(3) 観点別評価及び評定の向上

１学期と２学期の観点別評価及び評定を比較してみた（別表参照）。評価規準は変更していないが、意欲・関心・態度での大きな変化が見られた。これは学習カードを利用して生徒の意欲を高めようと実践してきた成果であると考える。また、他の観点のＣにおいてもその割合の減少が見られた。意欲を高めようと働きかけをしたことが、他の観点においても相乗的な成果として現われたことは嬉しいかぎりである。そして、評定においても、５の割合の増加とともに２・１の割合が大きく減少し、数学の基礎的・基本的な学力の定着の向上が見られている。

本年度は絶対評価１年目で、信頼のおける評価をしようと多くの時間を費やしてきた。この実践を通して、評価することは指導方法の一つだと考えられるようになり、さらに実践を深めていきたいと考えている。

（ⅳ）成果の普及方策

(1) 豊川市教育実践記録への応募

(2) 南部中学校ホームページへの実践結果の掲載

【別表】

＜５段階評定の変化＞

	１学期	２学期
5	７％	１５％
4	２８％	３２％
3	３５％	３８％
2	１３％	８％
1	１７％	７％

＜１学期観点別評価＞

	関心	考え方	表現	知識
A	４４％	１８％	３６％	３４％
B	３８％	４２％	３６％	４５％
C	１８％	４０％	２８％	２１％

＜２学期観点別評価＞

	関心	考え方	表現	知識
A	７７％	２２％	４８％	４７％
B	１６％	５２％	３５％	４１％
C	７％	２６％	１７％	１２％